

【首都圏】

シイタケが語る原発 ドキュメンタリー映画「失われた春 シイタケの教え」

2019年9月7日



映画「失われた春シイタケの教え」から

福島県の阿武隈山地は、東京電力福島第一原発事故が起きるまでは、日本のシイタケやシイタケ原木栽培の一大拠点だった。事故後、出荷はほぼ止まったまま。里山で農家や原木生産者らはどんな時を過ごしてきたのか。ドキュメンタリー映画「失われた春 シイタケの教え」を田嶋雅己監督（65）が完成させた。（鈴木久美子）

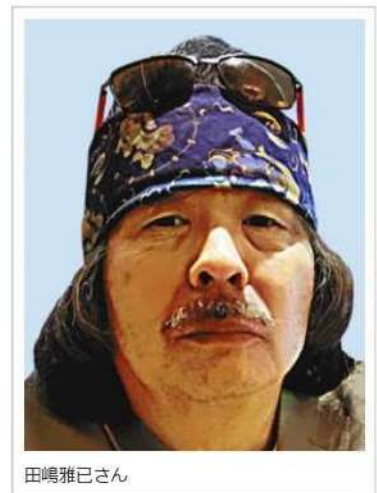
「福島の雑木の山は宝物だった。失われて初めて気付いた」。映画の中で、シイタケ農家が言う。

阿武隈山地では長年、コナラの木を薪や炭にしてきた。昭和四十年代ごろからシイタケ栽培用に転換し、質の良い原木に育てて全国に出荷してきた。

シイタケは他の作物に比べて土壌の放射性物質が移行しやすい。事故後、シイタケも原木も、なかなか安全基準としての指標値を下回らない。農家らはやりきれない怒りを抱える。生産を断念した人も、続ける人もいる。そんな思いを映画は伝える。

写真家の田嶋さんは、原発に関わる土地や炭坑で働く女性らを撮ってきた。映画を撮るのは初めて。

原発事故の翌年、茨城県のシイタケ農家を取材した際に阿武隈の原木栽培を知った。生産者の姿を正確に伝えたい、と東京都八王子市から福島県郡山市に居を移して五年間、撮影を続けた。



田嶋雅己さん

「シイタケは小さな作物だけれど、（生育の）背景には里山という大きな存在があり、生産者はその守り人。そう気付かされた」。人間の視点からではなく、シイタケに原発を語ってもらおうと「シイタケの教え」という副題を据えたという。

「生産者が、里山の再生は俺たちの手でやるという一点を確認できれば、知恵を出し合い、未来を描くことができるのではないか」と期待を込める。

第9回グリーンイメージ国際環境映像祭

「審査員特別賞受賞」記念上映会の詳細は、HPをご覧ください。

URL <https://lostspring.web.fc2.com/>

（右のQRコードでも、HPにリンクします）

